

差別をゼロにするために

「貧乏」「黒人」「馬鹿」「根暗」。世の中には、こうした数多くの差別言葉が存在しています。そして、それらを他人から、罵倒され浴びせられている人がいます。また、それは軽い悪ふざけとしてでも見られます。

僕の家族は、僕、姉、そして母の三人家族、いわゆる母子家庭です。僕も姉も学生で働きに出ていないため、生活の源は母の収入のみでした。そのため、必ずしも裕福というわけではありませんでした。そのため僕は、自分の家が貧しいと思うことは何度もありました。ですが、そのことを不幸だと思ったことは一度もありません。

ある日、母子家庭ではない友達と、その友達が持っているゲームソフトで遊んでいました。僕は自分が持っていないゲームソフトであったため、やり慣れておらず、負けてばかりいました。すると、その友達が、「持っていないからやり慣れてないよな。母子家庭で貧乏だから買えないんだろ？かわいそうに。」と、笑い、冗談まじりに軽い悪ふざけとして、言ってきました。するとなぜか、貧乏と言われ、「悲しい」ではなく、「悔しい」気持ちになりました。そのときはその理由が分かりませんでしたが、僕は友達に「わかってるね。じゃあ一億円ちょうだい。」と、モヤモヤする気持ちを押し殺し、冗談で笑って返しました。

その後、家に帰り、なぜ「悲しい」ではなく、「悔しい」気持ちになったのかを考えました。しばらく考えると僕は自分なりの答えに辿り着きました。それは、「かわいそう」と言われたからです。初めに書いたように、僕は自分で貧しいとわかっていたため「貧乏」と言われたことには事実として納得し、何とも思いませんでした。ですが、僕は自分が不幸だと思ったことは一度もありません。そのため、「かわいそう」と相手の価値感で決めつけられたことが悔しかったのです。

しかし僕も、テレビで亡くなった愛犬を埋葬するため、お墓を掘る人を見て、「かわいそう」と犬を飼っていないながらにそう思っていました。その話を犬を飼っている友達に話すと、その友達はこう言いました。「悲しいとは思いますが、愛犬のために最後まで何かできるなんて幸せだと思うなあ。」この言葉を聞いて、僕はあの友達と同じように自分の価値感を押しつけていたことに気がつきました。

このように、ちょっとした差別は、自分とは違った環境におかれる人へ自分の価値感を押しつけることから生まれるのだと思います。そしてそれが価値感の押しつけから偏見へと変わり、大きな差別へ発展してしまうのだと思います。

つまり、ちょっとした差別の元である価値感の押しつけがなくなれば、大きな差別が生まれることも少なくなると言えます。

そのためには、価値感に対する意識を変えることが必要だと思います。「価値感」と辞書でひくと、「物事の価値についての、『個人の』考え方」と載っています。そのように価値感とは、一人一人が持っている、個性なのです。そのことを理解し、人に押しつけるのではなく、相手の価値感も尊重することが重要だと考えます。こういった考えを人々が獲得することで、差別のない人権を尊重し合う社会への第一歩を踏み出すことができる。僕はそう考えます。

完全に差別にない社会になるまでの道のりはまだまだ遠いかもしれませんが、「国」「人種」「宗教」など、こういった垣根を超え、人権を尊重し合える世界になることを信じ、僕もできることからコツコツとやっていきたいです。